

# 鈴木醇爾に関する覚え書

高 野 光 男

はじめに——いま、なぜ鈴木醇爾か

鈴木醇爾（一九三五—一九九七。早稲田大学文学部国文科、同大学大学院文学研究科修了）について語ることが「早稲田の国語教育」というテーマにふさわしいか、躊躇するところがないわけではない。というのも、鈴木が主に活動の拠点としたのが、日本文学協会という研究団体であり、また筑摩書房の教科書編集という場であつたからだ。しかし、やはり鈴木醇爾の仕事を書く特質は、願望も含めて、いかにも「早稲田らしい」感じがする。私にとって「早稲田の国語教育」というテーマが想起させるのは、鈴木醇爾なのである。

ある時、それは一九八〇年代の終わり、私が日本文学協会国語教育部会に参加するようになって間もなくの頃だと思ふ。私は鈴木に次のように尋ねたことがあつた。早稲田大学教育学部はもつと国語科教育を専門的に学べるように教科教育を再編する必要があるのではないか、と。おそらくは、鈴木が都立高校に勤務する

かたわら教育学部の非常勤講師として国語科教育法を講じていたことから、意見を求めたのであろう。鈴木の答えは「早稲田はアマチュアリズムであることによつて存在意義があるのであつて、他の教員養成系大学のものであつてはならない」というようなものだった。私は不満であつたが、その答えは、それ以上突っ込んだものを言うことが憚られるような確固たる響きをもっていた。

鈴木没後十二年が経つ今、鈴木が教材化し、実践してきた教材たとえば、高史明の「失われた私の朝鮮を求めて」や茨木のり子の「空と風と星と詩」（尹東柱の詩と評伝）など、歴史的認識にかかわる問題を私の国語教育の課題にしようと「追っかけ」ていきながら、その実、鈴木の言う「アマチュアリズム」についてその内実を突き詰めようとしなかったように、鈴木の仕事を学びそこねてきたという思いが、私にはある。だが、それは私個人の問題としてあるだけでなく、国語教育研究全体にかかわる課題であるかもしれないと思うようになったのである。

そのきつかけとなつたのは、須貝千里の「一寸待つて」と呼

びかけて……—益田勝実の仕事—」(『日本文学』、二〇〇七・二)という風変わりなタイトルの論考である。この論で、須貝は『益田勝実の仕事』全五巻の最終巻、幸田国広編『益田勝実の仕事』5 国語教育論集成(ちくま学芸文庫、二〇〇六・六)をとりあげ、その編集のありかた、「通時性と共時性が重層化され」た編集方法が、かえって益田の五〇年代から六〇年代への「内的転換」を見えにくくしてしまっていると指摘している。須貝によれば、益田の「国語教育の仕事を考えていく際に、五〇年代と六〇年代の間に看過し得ない、見えるものを問題とする歴史社会的方法から見えないものを問題とする歴史社会的立場へという断層・飛躍」があり、その「断層・飛躍」の問題を扱う「国語教師・わが主体」(日本文学協会国語教育部会編『教師のための国語』、一九六一・十)と対になるべき「一つの試み——十年目の報告——」(『日本文学』、一九六一・八)を、幸田が割愛してしまったことに異議を申し立てているのである。そして、そのことは幸田個人に帰すべき問題ではなく、その背景に、これまでの国語教育史における益田勝実の位置づけをめぐる問題、すなわち益田の国語教育の仕事を最初の論文「文学教育の問題点」(『日本文学』、一九五二・二)に焦点を当て、それを「問題意識喚起の文学教育」という枠組みのなかで定位してきたことがある、と述べている。

国語教育界が益田を「行方不明者」にしてしまったという須貝の指摘を、私の関心に引きつけて言い添えるならば、そのことは益田だけでなく、益田を畏敬し、益田の「内的転換」を自らの課

題として生きた抜いた鈴木醇爾の仕事をも位置づけそなっている、ということになる。

……益田の「考え・感じとり・創り出す」教育を支えるものは、歴史科学的方法であつた。(中略) 益田は、「形式論理的に考えるのではなく、歴史的に現実的に、しかも新しい人間像の方向に沿って考える」ことを教えようとしたのである。そしてさらに、考え・感じとり・創り出すことの基準に、「総体がそこに到達しているような伝統」を置き、「伝統を継いで出発する人間を形成」しようとした。戦後の新教育におけるばら色の合いことばとなつていた「人間形成」が、益田勝実によつて「歴史社会的な認識方法の教育」の観点からとらえ直され、アクチュアリティを与えられたのである。

引用は、田近洵一の『戦後文学教育問題史』(大修館書店、一九九一・十二)のなかの「益田勝実の『現実との対決』としての文学教育」の一節である。田近はこのように述べて、「文学教育の問題点」で「益田の提起した現実と対決する人間形成の国語教育観は、現象として言語技術主義に堕した言語生活主義を、その思想の次元でよみがえらせ、それをさらに一歩進めたものであつたと見るべきではないだろうか」と論を結んでいるが、このとき益田が拠つて立つたのが、近藤忠義、風巻景次郎、あるいは永積安明、猪野謙二に始まる戦前の歴史社会学派の戦後の展開、竹内好らの「国民文学論」であり、その根底にある歴史社会学的方法

法であつた。この「国民文学論」の国語教育版と言えるのが、荒木繁の「問題意識喚起の文学教育」であり、益田の「文学教育の問題点」はその前史として位置づけられてきたのである。

だが、荒木実践「民族教育としての古典教育」——万葉集を中心として——（『日本文学』、一九五三・十二）は、西尾実によつて「問題意識喚起の文学教育」と命名されることで、その本質である「民族教育としての」という視点が脱落」（田近前掲書）し、それとともに歴史社会学的方法も脱色化し、脱イデオロギー化していく。そのことで荒木実践は文学教育の古典となつたのである。こうして国語教育史は、荒木実践に対する広末保、西郷信綱、さらには伊豆利彦の批判を経て「深化」する荒木の文学教育論を記述し、その影響下で大河原中実蔵の「状況認識の文学教育」や太田正夫の「十人十色の文学教育」が登場するということに、その後文学教育の展開をとらえるのが一般的である。

再び須貝の論に戻つて、須貝が「国語教師・わが主体」は、それと対をなす「一つの試み——十年目の報告——」もだが、取り上げられて、位置づけられることはなかった。浜本氏も田近氏もそのようにはされなかった」と難じている点について言及しておきたい。田近は前掲書で「益田の国語教育観の生成、発展の過程は、今日改めて検討されるべき重要な問題をはらんでいる」と述べている。もちろん、これだけでは田近が意図するところは明かではないが、この「発展の過程」こそ、まさに須貝が重視する「断層・飛躍」の問題、すなわち「歴史社会学的方法から歴史社会的立場へ」の転換であつたことは十分に推測可能であらう。田近

のいう「発展の過程」、須貝のいう「断層・飛躍」を「歴史社会学派」継承の問題（正確に言えば、益田の「歴史社会的立場」継承の問題）として受けとめたのが鈴木醇爾であつたというのが、この小論での私の見取り図なのだ。

この見取り図から言えば、たとえば、一九四五年から一九八五年までの文学教育の基本論文を収録する、西郷竹彦・浜本純逸、足立悦男編『文学教育基本論文集』全四卷（明治図書、一九八八・三・九）には、鈴木教材論や実践論が収められてもよかつたのではないかと思つてしまふのである。日本文学協会における文学教育の展開に限つて言えば、「益田・荒木・太田・大河原」という流れに「益田・鈴木」というもう一方の流れを複線的に布置することで、戦後国語教育における「歴史社会学派」継承の問題がより鮮明に浮かび上がつてくると考えるのである。

鈴木醇爾の仕事概括すると、一九七〇年代の戦争文学教材の可能性の追求、八〇年代の公害問題、アジアや歴史認識をめぐる教材発掘とその実践。九〇年代の国語教科書をめぐる論考があるまとまりをもつて進められているということに気づく。このほかに、八〇年代末には筑摩書房から「近代の文章」（一九八八、分銅惇作との共編）、『夏目漱石入門』（一九八九、猪野謙二との共編）を刊行し、また一九七〇年から没する一九九七年までの二十七年間筑摩書房の教科書編集に携わり、筑摩のPR誌『国語通信』に多くの文章を寄せている。これら一つひとつについて検討が必要であるが、それは私の能力を超えるものだ。私の関心に即して言えば、鈴木の仕事現代国語教育の展開のなかでとらえ直

すためには、鈴木が益田の「内的転換」に学んで自らの文学教育の課題を把握した七〇年代の実践、その発展としての八〇年代の教材発掘とその実践、そして九〇年代の国語教科書をめぐる論考が重要だと考えている。

この小論では、九〇年代の国語教科書論を中心に鈴木の仕事を描くことで、特集のテーマに心えてみたい。

## 一、鈴木醇爾の国語教科書論①

### ——「岩波版『国語』教科書を読む」

『風信おふくる篇 鈴木醇爾遺稿集』（安楽城出版、二〇〇〇・八）の「あとがきにかえて」で、夫人の鈴木テイ子は、鈴木が「退職後に作りたいと考えていた本が三つ」あったと述べている。一つは遺稿集に収録された「風信おふくる篇」であり、二つ目は鈴木が二十三年にわたって都立高校教員としてかわり続けた山岳部の記録、三つ目は鈴木が「尊敬する益田勝実先生（国文学者、教科書編集委員として数年間直接に接する機会に恵まれた）の国語教育の仕事についてのまとめ」である。

三つ目の益田勝実の仕事については、その一部が「益田勝実教科書編集の歩み」（『日本文学』、一九九一・八）に結実している。また、同じ時期に、鈴木は岩波版『国語』一〇巻（中学校国語漢文用検定教科書、一九三四年から四五年まで使用された。一九八八年に岩波書店が復刻）に関する論考を、『国語通信』に六回に分けて発表している。第一回は「岩波版『国語』教科書を読む——西尾実の文学教育——」（一九九一・四）で、第二回以降が

「漱石・鴎外文学の教材化」（同・六）「龍之介・勘助・直哉の教材化」（同・八）「『手首の問題』と『心の小径』」（同・一〇）「古典の世界」（一九九二・一）「『物学び』と『生涯稽古』」（同・三）である（なお、第二回以降は「岩波版『国語』を読む」という副題が付されている）。つまり、九〇年代初頭、鈴木は二つの国語教科書論を発表していることになる。まず、岩波版『国語』に関する論考について検討しておこう。

論全体を概括的にとらえれば、第一回は総論にあたり、岩波茂雄がめざした「理想的教科書」刊行と検定制度との矛盾対立、改正中学校令（一九三二年）による国家主義的再編成と西尾実の教科書編集の関係が論じられる。第二回以降は小説、科学エッセイ、古典といったジャンル別に採録教材の具体的な検討が行われ、西尾の国語教育理論が採録教材との連関のなかでとらえ返される。全体を通じて、岩波版『国語』の特色を浮かび上がらせるために、当時好評だった五十嵐力編『純正国語読本』（早大出版部、一九二九年）と比較する方法が採用され、西尾実がめざした文学教育の実相が教科書編集という側面から描き出されているのである。

鈴木の分析は多岐にわたるが、大別して二つの観点からなされていると言えるだろう。第一は、天皇制ファシズムや国家主義と国語教科書とのかわりである。検定制度との関係もここに含まれる。改正中学校令による国家主義的教育の再編成、とりわけ修身、歴史、国語などの科目が天皇制ファシズムの先導的な役割を担わされた時代の流れに、岩波版『国語』がどう困り込まれ、また拮抗していったか、という観点である。

鈴木が最初に取り上げたのは、当時の検定教科書に不可欠な教材とされた「明治天皇御製」と「国旗」、「日本海海戦」と「乃木大将と殉死」である。前者の天皇制を擁護する教材では、『純正国語』が「書き下ろしが多く、あるいはより露骨で」あるのに対し、岩波版『国語』のほうは「よりわかりやすくして、より心情的に訴えている」という違いがあるものの、鈴木のことばで言えば「目くそ鼻くそを笑うたぐいである」。後者の戦争賛美教材も同様であって、『岩波『国語』は「純正国語」に学んでは、東郷と乃木に焦点化しているが、双方とも日露戦争が生んだ高揚に同調、支持を寄せる教材を揃えていることに、変わりはない」としている。

たとえば、『両雄の会見』（巻二）では、この教材で「国際的に認められた英雄的軍人政治家というイメージをはじめに形造つておいて、日本海海戦に及ぶとき、その勝利は国際的に認められた」という読み方を方向づけ、しかもその方向は「日本の侵略性や帝国主義的侵入を肯定する心理的基盤を生み出す」と鈴木は述べる。それによって「日露戦争が切り開いた、日韓併合や、満州などの侵略は、明治・大正・昭和と続く近代日本の躍進のイメージにかくされてゆく」。「岩波『国語』は、この意味で戦争協力をしたのである」と、鈴木は冷静な評価を下している。

だが、これに続いて、鈴木は、浅川巧の死を悼んで書かれた安倍能成の「人間の価値」（巻六）に言及し、その「強いられざる内鮮融和」という表現を根拠に、この教材が「不十分ながら、日本の帝国主義的進出を批判する目を持って」おり、「安倍の頭の

中にあつたのは植民地支配がくりだした、強いられたい融和への、人間的抵抗であつただろう」と述べるのだが、これはどうだろう。別の箇所であるが、吉村冬彦（寺田寅彦）の科学エッセイについて、鈴木は「普段の生活や身辺へ科学的な目や考察を加えることを推し進めること」には「水面下でファシズムや権力支配への批判を内在させている」と述べている。古典教材に関しても、「倭建命」が「古代天皇制を批判し、近代天皇制をも相対化する視点を含んでいる」という指摘や、「物理学」が教師や教科書を相対化し、「さらには検定制度そのものに拘束される学習のあり方への盲従を戒め」ており、「宣長の求める学問の道はこういう自由な精神に支えられていることを岩波『国語』は見抜いている」といった指摘もある。このような分析に基いて、天皇制を擁護し、軍国主義を賛美する教材は「検定制のワクとして押しつけられているもので」あって、「検定のワクの中で、岩波『国語』は天皇を頂点とする軍国主義擁護の金ピカ教材のところどころに、メツキのハゲ目のような部分を含ませて」といると、鈴木が岩波版『国語』に時局への抵抗をとらえている点には、すぐには頷けないものがある。周到な教材分析の背後に鈴木の「期待の地平」が隠れているようにも思えてしまうのである。西尾実における戦前・戦後の連続性と不連続性の問題でもあるのだが、教材分析に加えて西尾の、戦前・戦後という二つの言説空間をさらに多面的に検討していく必要があるのではないかと思う。

紀行文についての記述にも同様のことが言える。鈴木は『純正国語』と岩波『国語』の紀行文を比較し、数的には前者が多く、

しかも「海外紀行が多く、目を世界に向けていることが特色だ」とする。それに対して後者は「歌人、俳人、それに登山家などのものが多い。紀行ではなくて文学者が出生地の風土などを書いたものもある」と述べ、その教材群がすべて日本の風土、自然を描いたものであるのは「風景や自然を見る目と心を養ったもの」で「広大で、神秘に満ちた自然と、その自然に囲まれ、それを喻として人生を探求する方法は、一般的だったのだ」と指摘している。だが、日本において郷土教育運動が高まり、郷土教育連盟が設立されたのが一九三〇年であることを考え合わせれば、国家主義教育に包摂される郷土教育や郷土主義との関連で検討するといった手続が必要ではないかと思われるのである。

第二の観点は、西尾の最初の体系的な著作である『国語国文の教育』にみられる国語教育理論との関係である。「行的方法」という東洋的な道の探求を理想型とする学び、「素読・解釈・批評」という読みの体系化や「解釈」における「主題・構想・叙述」さらには戦後の「言語生活主義」へと発展・深化する「言語活動」重視の姿勢が、教科書編集という実践的な場でのように達成されているか、という観点である。

鈴木は、岩波版『国語』の特色として、夏目漱石や森鴎外をはじめとする近代作家の作品を多彩に教材化したこと、芥川龍之介・中勘介・志賀直哉など現代作家についても意欲的に教材化を進めたことをあげている。この背景には、改正中学校令施行規則の「文芸ノ趣味ニ富ミテ心情ヲ高雅ナラシムルモノ」という文部省の方針があり、漱石の「東洋の詩境」〔「草枕」、巻八）や「秋

露」（「思ひ出すことなど」、巻一〇）、鴎外の「寒山拾得」（巻七）や「高瀬舟」（巻一〇）は「東西文化の対比をへて、東洋的美質を見出す視点から教材化が行われ、これが遠く大東亜共栄圏などの政治宣伝の浸透する土壌を作り出した」と指摘している。しかし、漱石・鴎外の教材化は、このような時局の影響とは別に、西尾が理想とした「行的方法」、「我執を去り己を空しくした純一な道念としての全心身の集中」をもつて学ぶべきであるという主張と深くかわわっていたと鈴木は述べる。「教材の細部が全体とかわりあい、構成・展開を通して主題が浮びあがる、という、読みの向かうべき方向を西尾美は提唱している。主題・構想・叙述の三点セットである」。それを体現するのが漱石・鴎外教材であり、「行的方法」から読みの理法までを含め、西尾の文学教育にかなっていたというのである。

巻一の最初に置かれた「生きた言葉」と巻一〇の最後に置かれた「生涯稽古」はともに西尾が執筆した教材である。岩波版『国語』の首尾一貫性を達成するこの配置が「理想的教科書」の方位であると同時に、西尾の文学教育の端的なイメージでもある」という鈴木は指摘は異論のないところであろう。「生きた言葉」は「日常卑近の中から「表現に生命あり結晶あるもの」の例として選びとられたもので、『国語国文の教育』のキーワードの一つである「言語活動」重視を象徴する教材である。また、「生涯稽古」は西尾の提唱する「行的方法」の典型教材であり、鈴木はこの教材に「岩波『国語』の到達点」を見ている。この論考の最後に「この教科書は、時代に底流する新しい生命を組織したので

ある」という一節がある。この「新しい生命」が「人生や現実が切りむすんで生動することば」によつて組織されるという鈴木の言に倣つて言えば、岩波版『国語』は「時代に底流する新しいことばの学習を組織した」と言い換えることもできよう。

以上、鈴木論をたどつてみると、鈴木が岩波版『国語』を論じた意図もおぼろげながら見えてこよう。第一は、教科書というメディアが、作り手の「理想的教科書」像と制度や諸機制との桎梏の中で生み出されるというぎりぎりの仕事であるという認識に立つて、西尾実がいかに国家主義や検定制と相克したかという実相を描くことである。そして、それは鈴木自身の教科書編集に対する厳しい問いかけに反転していくはずのものである。第二は、岩波版『国語』が「国家主義に傾いた検定制の中で、国家主義と異なる別種のナショナルイズムを提示して」おり、「それは、民俗と地続きの、柔軟でしかも努力をおしまない民族の魂を追っている」という、この論考最後の一文に性急に登場する「民俗」「民族」という用語にかかわっている。この二つの語は、鈴木が畏敬する益田勝実の国語教育論のキーワードでもある。岩波版『国語』と、戦後、同じく西尾の編集によつて出発する筑摩書房の高校国語教科書との連続性をとらえることで、益田勝実の国語教科書編集の源流を遡るといふ構想があったと推測されるのである。

## 二、鈴木醇爾の国語教科書論②

### ——「益田勝実国語教科書編集の歩み」

「益田勝実教科書編集の歩み」は、『日本文学』の国語教育特集号、「豊かさ」の中の「文学教育」というテーマに応じて執筆された論考である。益田の国語教科書編集に関する研究であるとともに、すぐれた益田の国語教育論ともなっている。幸田国広は学位論文「戦後中等教育における『国語科』構造の研究——新制高等学校『国語科』の成立と展開」（二〇〇七）において、序章・終章を除く全十三章のうち四章を費やし、益田を視座に高度成長期の国語科像を考察している。鈴木論考もその先行研究の一つとして位置づけられているが、こうした最新の益田研究の到達水準に照らしても、鈴木の研究は依然、遜色ないものである。鈴木がこの論文で取り上げた益田の文章は合計十五編、国語教育に関する論考にとどまらず説話研究や民俗学研究にまで幅広くわたっている。しかも、それぞれが益田研究の勘所をおさえた必読文献である。このことは鈴木の益田理解の奥行きを示す証左ともなっているように。

最初に、鈴木論の構成をおさえておこう。全体は「一」から「八」で構成され、ほぼ時系列にしたがって益田の教科書編集について論じている。益田が編集に携わった教科書の時期に即して整理すれば、最初の『国語総合』から次の『現代国語』『古典甲・乙』までの時期（一九五九年から七二年まで）が「二」から「六」、『現代国語』『古典甲・乙、古典乙』の時期（一九七三、八〇年）が「七」で、「二」が緒論、「八」が結論ということになる。

まず「一」では、次のように、益田の教科書観が端的に語られ



る。

益田さんは、教科書編集を、単に営利事業とは考えず、編集委員会がうちだす新しい国語科教育運動を担うものと考えていた。教科書が、いつも戦後国語科教育そのものの展開にとって、有効な触媒であることを、求めつづけていた。その戦後国語教育のイメージでは、検定制は不要のものであり、学習指導要領が、学習内容について拘束力を持つことにも反対なのであった。教科書がよって立つこれら制度に反対でありながら、その教科書を、新しい教育運動の媒介とすることを探索する、という自「矛盾」を、益田さんは激しく生きた。

この「自「矛盾」」を「激しく生き」、教科書を媒介として「国語科教育の革命」運動を模索するのが、鈴木がとらえる益田像である（ここには先に検討した岩波版『国語』の発行者、岩波茂雄の「理想的教科書」刊行と教科書検定制度の「矛盾対立」も重なってこよう）。新しい教育運動を媒介する「理想的教科書」を求めて、戦後の時空間を「激しく生きた」益田の軌跡をとらえるのが、この「益田勝美教科書編集の歩み」のもくろみなのである。

「二」では、一九五〇年代の「文学教育の問題点」や「しあわせをつくり出す国語教育について」が書かれた時期の国語教育論から、教科書編集に加わった一九六〇年前後の時期に柳田国男を契機として「脱皮変身」する、益田の「内的転換」が論じられる。この転換は「新しい教材、すぐれた教材を次々に生み出させる原

動力とな」つたと鈴木は述べている。

「三」から「六」はその「原動力」によって生み出された教材群の検討である。「三」が古典教材、「四」が民俗学研究成果に基づく教材、「五」は科学教材、「六」は歴史社会的立場から選ばれた教材が対象となる。益田が発掘した教材がいかに多様な分野にわたっていたか、「益田さんは多面的だから、かえって焦点があわせにくい」と鈴木が述べているほどである。

「七」では、益田が最後にかかわった一九七三年の「現代国語」「古典乙・古典Ⅱ」時代の教材を検討している。そのことを通して、益田の国語教科書編集の到達点が「新しい日本語を創造する」「新しい日本語を求めて」「より有効な新しい日本語を探りあてよう」といった表現でとらえられている。

「八」では、益田の国語教育論ないしは国語教科書論からみた「理想的教科書」像、あるべき教科書の姿が総論的にまとめられている。

さて、こうして鈴木の論を概括してみると、「文学教育の問題点」などで戦後文学教育の出發期を担った益田が、一九六〇年前後を境に「脱皮変身」し、一九七〇年代にさらに深化していくといった益田像が結ばれるように思われる。そこで次に、この転換と深化に焦点を当て、鈴木がとらえた益田像をさらに具体的に把握してみたい。

益田は、編集にかかわった最初の教科書、一九五九年の『国語総合』で、すでに柳田国男の「椿は春の木」を教材化している。鈴木はそれを「ここには文字を持たず、口ことばで用をたしてき



た人々の生活を見つめようとする視点がある。民俗的視点もある」と評価している。続いて、益田の『説話文学と絵巻』（三二書房一九六〇・二）の「あとがき」にある「当時とはどんな考え方が変わっていき、結局、文学の内部に反映するもので歴史を見ようとする方法が、結果的には残った」という一節を引き、「この編集の時期、益田さんは脱皮変身するように思われる」と益田の転換を的確にとらえている。そして、この転換を「ことはを単に現実を写す道具と見るのではなく、語られ、書かれる方法によって、文学の内部に変形しながら現実が反映してくると考える姿勢がある」と説明し、さらにこの転換をもたらしただのが柳田民俗学との出会いであったと論を進めている。益田は、柳田民俗学の「常民のことはの生活の歴史の構造から探索していく姿勢」に「未来に対する大きな可能性」を見たのである。

こうした益田の転換は、『火山列島の思想』（筑摩書房、一九六八・七）に達成される古代文学研究の新しい方向をもたらしとともに、益田の国語教育論にも大きな地殻変動を呼び起こす。この時期に書かれる「一つの試み——十年目の報告——」や「国語教師・わが主体」は、その転換を跡づける仕事である。たとえば、「一つの試み——十年目の報告——」では、益田はこれまでの教育実践を「歴史社会的思考法を教えることもうと強調しているにすぎず」、「現実をその構造において把握していくことができるような認識力を持つ、新しい民主的な人間像が、自分自身の教育の目標であり、社会科学的方法の（既成のもの）に依存しながら、何かを夢見ていた」と反省的にとらえ返している。益田の初期の

「文学教育の問題点」や「しあわせをつくり出す国語教育について」における「現実認識の文学教育」からの離陸である。こうして「国語そのものの（ことばの持つ考える機能）へことばの考えていく生きた力」に即して、国語教育を展開する必要がある」という方向を打ち出していくのである。

この転換が「新しい教材、すぐれた教材を次々に生み出す原動力とな」って、益田は多彩な教材群を発掘していくのだが、この教材発掘を通じて、さらに益田の国語教育論が深化するというのが、鈴木を描く七〇年代の益田像である。鈴木は『国語通信』に載った益田の講演「なにが国語教育か」（一九七四・九）を周到に引用し、そこに「新しい日本語を創造する」「新しい日本語を求めて」「より有効な新しい日本語を探りあてよう」といった表現を布置し、六〇年代に益田がめざしたことばの教育との相違を浮かび上がらせる。

結局、益田さんは、日本語を、生成変形し続ける、永遠に未完なことばにとらえているように思われる。ことばの規範性は打ち消しがたくあるが、日本語は、口ことばによる文字ことばの変形・活性化が雄弁に示すように、制度を絶えず超えてゆくところに、その生命があったと考えておられるようだ。

鈴木は、七〇年代の益田国語教育論の深化をこのように結論づけ、さらに、続けて「ことばの教育とか、考える文学教育とか、

益田さんの国語科教育を括つておくのものを射ていると思うが、それは、日本語を学ぶことで、日本語の規範性を限りなく越えてゆくことを求めるものである」と述べている。ここから国語教育史における益田の位置づけに対する不満を読み取ることもできよう。

以上、鈴木がとらえた益田勝実像をたどつてみて思うのは、それがいわゆる「研究」としてではなく、鈴木の実践者、編集者としての課題を確認するために語られているということである。それが鈴木、益田論の軸足なのである。だとすれば、「益田勝実教科書編集の歩み」が鈴木の仕事にどう結びついているのが問われなければならないだろう。このことに関して、ここでは一例だけ、あげておきたい。

この論考の末尾に、益田が考える「理想的教科書」について触れた箇所がある。「理想的教科書」には「日本文学と、日本語の力動的な史的展開を明らかにする教材群もあ」つて「各時代の典型的表現と、それを産みだした時代精神とが、通時的というかすべての時代について、明快に教材化されるのである」と、鈴木は述べている。こうした教科書として、鈴木が最後にかかわった筑摩書房の『現代文』（一九九五—一九九九。ただし、後継の改訂版にも鈴木の名前がある）がある。同時期に発行された二十三種の『現代文』のうち、この筑摩書房の『現代文』だけがいわゆる「文学史（表現史）的配列」であつて、他はすべて「ジャンル別配列」あるいは「テーマ単元的配列」となっている。編集趣意書では次のように解説されている。

一つの試みとして、本書の構成を、成立年代による文章・作品のグループ化によつて、時間軸に沿うものとした。序章、第1章明治、第2章大正、第3章敗戦まで、第4章戦後としてある。この構成により、いわば表現の変遷を必要に応じてたどることができるという点において、一つの道案内を示したつもりである。それはまた、精神文化の歴史性を意識し、そこに隠されている共通言語を探ることを通じて言葉そのものに對する自覚を促すという意味で、ここに収めた教材の内容面とも深くかかわっている。

益田の歴史社会的立場を継承する鈴木醇爾の最後の仕事としてふさわしい教科書であると言えるだろう。

### 三、果たせなかつた聞き書き

#### 『戦後文学教育の歩みと現代の課題』

小論の最後に、国語教科書論ではないが、益田勝実にかかわる鈴木の幻となつた仕事を紹介しておきたい。

鈴木は都立高校定年一年前の一九九五年、戦後五〇年及び翌年に控えた日本文学協会設立五〇周年を機に、国語教育部会の記念出版として聞き書き『戦後文学教育の歩みと現代の課題（仮称）』の企画案をまとめ、それを国語教育部会に提案している。戦後国語教育を担つた先達が健勝のうちに直接話を聞いておきたいという案を鈴木は早くから構想していたようだが、日本文学協会創設

期から戦後文学教育運動の担い手たちと直接交流があり、同種の企画を自身の最後の責務と考えていた難波喜造、それから国語教育部会を牽引する須貝千里を「言い出し人」（発起人）として企画案をまとめ、国語教育部会です了承を取りつけていたのである。

その年の四月、鈴木は自宅を焼失するという不運に遭うが、それをおして編集準備会発足ための準備会を予定どおり開催し、五月には第一回編集準備会が行われた。鈴木がレポーターになり、出版企画原案を報告した。その時のレジュメにはこの企画のねらいが以下のように簡潔にまとめられている。

戦後50年、日本文学協会へ国語部会へ設立50年を機に、戦後文学教育史から学び、現在の文学教育の課題を追求する。日文協・国語教育部会の歩みを軸に、その同時に並行的に活動したり、分派して活動してきた民間教育団体で文学教育や国語教育を推進してきた団体の達成をふまえて、現存するリーダーから、それぞれの歩みを聞き書きし、文学教育の歩みを明らかにする。また、これをふまえ、現在の課題を浮き彫りにし、その伝統の継承とさらなる創造展開を模索する。

この時、鈴木が聞き書きの対象にあげたのは、日本文学協会では益田勝実、荒木繁、野本秀雄、森山重雄、伊豆利彦、大河原忠蔵、太田正夫の七名、これに教科研国語部会の奥田靖雄、兄言研の小松善之助、日本作文の会の田宮輝夫、文芸研の西郷竹彦、日

教組教研国語の小野牧夫、文教研の荒川有史を加えた十三名で、巻末に田近洵一、浜本純逸、府川源一郎、須貝ほか国語教育部会のメンバーが加わった座談会を構想していた。

討議では次のような意見が出された。

①敗戦後五〇年を全体としてたどるのではなく、六〇年代初頭あたりまでを重点的におさえ、イデオロギーと革命運動、革命と文学、戦後民主主義の挫折などの諸問題を浮かび上がらせる。七〇年以降は何を軸に聞き書きするのか、むずかしいのではないか。

②西尾実、国分一太郎ら故人をどのように関連させて登場させるか。

③日本文学協会以外の民間教育団体のリーダーに聞き書きするのは、それぞれの内部事情もあつてむずかしい。日本文学協会会員にしろ、その人と関連・発展させる方向で考える。

④たんに回顧談として聞くのではなく、現在の教室のむずかしさをどう克服するかという問題意識に立つて聞き書きを行う。

このほか、民間教育運動を抜きに歴史がつくられようとしており、そうした研究が流行るなかで歴史をつくるという自覚が必要だろうと、研究動向と関連する意見も出されたように記憶している。「聞き書きのおもしろさは、論文とは異なり、論文を支える時代のパラダイムや風潮、連帯や対立の綾、書き手の身体論的側面などを聞くこと、つまり、書いたものの裏話であらう。なぜこのようなことをしたのか、書いたのか、これを明らかにしたい」という、この企画を支えるコンセプトにもとづく鈴木の発言も見

逃せない。ここには、益田勝実が教材化した宮本常一「梶田富五郎翁を訪ねて」という聞き書き教材を実際に教室でとりあげ、また生徒に聞き書きに取り組ませてきた鈴木ならではの聞き書きに対する深い認識が端的に表れている。

こうして、聞き書きの対象を日本文学協会会員に限定する方向で、それぞれに二名から三名の担当者配置して企画の具体化が始まった。著作・論文目録、関係の深い他の研究団体や人脈、その人物をめぐるキーワードなどの資料を整え、それからそれをもとにその人に聞くべき事柄を整理し、第二回以降は個別の対象について具体的な検討に入ることになったのであった。

次いで、第二回編集準備会が七月に開催された。そこでは、本の形式、交渉すべき出版社の候補として四社があり、交渉担当も決められた。そのあと、須貝千里が荒木繁について、鈴木醇爾が益田勝実について、須貝と府川源一郎が共同提案というかたちで小野牧夫について具体的に聞き書きの項目とその主旨を報告し、それぞれの提案をめぐる話し合いが行われた。ここでは鈴木があげた項目だけを紹介しておく。

#### A 五〇年代・国民文学時代の益田さん

##### ア. 神代高校定時制での実践

##### イ. 岩波講座「文学」「創造と鑑賞」とのかかわり

##### ウ. 筑摩書房の教科書編集集のこと

##### エ. 日教組教研覆面助言者のこと

##### オ. 伝統継承と国民文学

#### B 六〇年代・説話や民俗への傾斜をめぐる

##### ア. 民話の会での木下順二や宮本常一との出会い

##### イ. 柳田国男・南方熊楠や「民俗の思想」のこと

##### ウ. 「説話文学と絵巻」のこと

##### エ. 古典教育へ夢について

##### オ. 「火山列島の思想」について

##### カ. 神話的想像力と民衆

#### C 七〇年代・ことばと文学教育

##### ア. 「歴史社会的方法から歴史社会的立場へ」の転換

##### イ. 「戦艦大和の最後」「黒い雨」の教材化の立場

##### ウ. 文学教育と日本語

##### エ. 考える力と内言

##### オ. 「国語科教育法」の執筆

この項目に添えて、鈴木は「こんな提案はようしなかった。A、B、Cの時代区分を示し、それぞれの時期のキーワードをいくつか上げたにすぎない」とメモを残しているのだが、この「こんな提案はようしなかった」とはどのような意味だろうか。鈴木が提案した項目は「益田勝実教科書編集集の歩み」の論文構成とほぼ重なっており、益田の仕事の重心を十分おさえたものになっていると言えるだろう。ただ、鈴木提案をめぐる話し合いで「益田さんの仕事が一貫して手づくり性をもっていることの意味を考えた」といった発言も出ていた。そのことから推測するならば、鈴木木これらの項目からイメージされる益田像が、どれだけ緻密に

項目を用意したとしても、聞き書きが可能にするはずの「書き手の身体性」「手づくり性」を含めた益田の全体像、益田の多様性や広がりを描ききれない、そうしたずれやギャップに対する鈴木の不満が「ようしなかった」ということばで反省的に表明されたのかもしれない。

さて、その後、何度が編集準備会が開催されることになるのだが、私の手元には資料も残っておらず、記憶も定かでないので、これ以上の紹介はできない。年が明け、一九九六年の春、退職を間際にした三月末に鈴木は肺に病巣が見つかり、入院手術を受け、療養生活に入ることになる。そして、その年の十二月、私は、鈴木から「聞き書き準備委員の皆さまへ」という便箋五枚にわたる文章が同封された手紙を受け取り、その月に開催されることになっていた国語教育部会の冬合宿での経過報告を託された。そこには、鈴木が関係する出版社とのやりとりとその後の経過（内諾を得ていた出版社が急遽出版をとりやめたこと）、医師からは回復に向かっていると励まされているがしばらくは体調不良で話し合いに参加できないこと、益田勝実が聞き書きに応じてくれそうもないこと、それから今後の進め方についての三通りの案が記され「戦後50年、どのような問題を引きつぎ、また問題の立て直しをおこなうか、という根本にもどrittつ、考えていきましよう」という一文で締めくくられていた。

翌一九九七年の夏、鈴木は亡くなり、結局、この出版企画は実現することができなかった。だが、重要なのは、「戦後50年、日本文学協会〈国語部会〉設立50年を機に、戦後文学教育史から学

び、現在の文学教育の課題を追求する」とき、論文集という形態ではなく、聞き書きという形式を選んでいるところに、鈴木（を含めた日文協国語教育部会）の、益田から学んだ「口ことば」を重視し、それがもつ身体性や手ざわりといった豊かさによって書きことば的世界、すなわち国語教育史や国語教育の研究状況を組み換え、乗りこえていこうとする、鈴木の言う「アマチュアリズム」が生きているように、私には思えることなのだ。

#### おわりに

鈴木醇爾の教科書編集を含めた教育実践と研究は、戦後文学教育運動、とりわけ益田勝実の仕事の正面から受けとめ、継承・発展させる方向で進められた。それはまた、益田の国語教育論を歴史として国語教育史のなかに封じ込めるのではなく、現代の国語教育に架橋し発展させていこうとする極めてラディカルな目的意識に支えられていたのである。鈴木は歴史や社会、日本語に対するスタンスは今日の国語教育を考えていくうえで示唆に富むものであり、学ぶべきものであろう。鈴木の言う「アマチュアリズム」を視野に含めることがなければ、「早稲田の国語教育」は、本来の目的を見失って、「アカデミズム」に閉ざされていくほかはないと、私は考えている。

（東京都立産業技術高等専門学校）